狐の渡

土田耕平

青空文庫

むかし、一人の旅人が、科野の国に旅して、野路を踏みたがへ、犀川べりへ出ました。むかうへ渡りたいと思ひましたが、あたりに橋もなし、渡も見えず、困つてをりますと、

「もうし、旅のお人。」

といふ声がします。見ると、いつどこからとも知らず、一人のうつくしい顔した子どもが舟をこぎよせてゐるのでした。

「渡しのコン助といふものだが渡しの御用はないかな。」

といひますので、

「御用は大有りだ。早くわたしてくれ。」

と旅人は舟にとび乗りますと、子どもは艪をたくみにあやつつてむかう岸へつきました。舟をおりようとして、旅人がひよいと見ますと、へさきに立つてゐる子どもの尻べたから、長い尻尾が垂れてゐました。

なんだ、狐なのか、未熟な狐めが化けそこねてゐるわい、と旅人はをかしくなつて、舟を下りました。岸べりに、はびこつてゐる、葛の葉を一枚むしりとつて、何げない顔で、狐の前にさし出して、

「さてコン助さんとやら、渡し賃に小判一両あげる。さあさ、遠慮なく受けとりな。このあたりには、よく狐めがゐて人を化すといふ噂だが、わしは狐ぢやない。葛の葉を見せ変へて、小判だなんといはぬから、よくあらためて受けとりな。さあさ。」

コン助は、えらく恐入つたやうすをしてゐましたが、きふに、旅人の手から葛の葉をもぎとるやうにして、ぷいとすがたを消してしまひました。そのあとで、旅人は、ひとり大笑ひしました。

それから、旅人は道をいそいで、夕方宿場へつきました。宿をとらうと思ひまして、目にとまつたはたご屋の門をくゞりますと、宿のあるじは旅人のすがたをつくづく見て、

「さきほど、お知り合の方だと申されて、うつくしげなお子供衆から、これをおあづかりしました。」

といつて状箱のやうなものを出しました。

「わしは、この辺には知り合なぞない筈だ。人ちがひではあるまいか。」

とふしんに思ひながら、その状箱のやうのやうなものをあけてみますと、

サツキハ、バケソコネテ、ヲカシカツタダロ、コバンハ、カヘシテヤルヨ、コンスケ。

としたゝめて、みごとな小判が一枚入つてゐました。

さては渡の狐であつたのかと、旅人は合点して、小判を火にあてましたところ、めらめらと焼け失せてしまひました。おどろいたのは、宿のあるじでしたが、旅人から狐の話をきいて、一しよに大笑ひしました。

狐の手紙は、あるじがもらひうけて、家の宝にしてあるとかいふ話であります。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「裾野」古今書院
　　1936（昭和11）年4月
入力：菅野朋子
校正：noriko saito
2013年5月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐の渡

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/